

第27回「温帯林概論」開講 — 鹿児島大学生来校 —



御明神演習内での実習



小岩井農場を見学する鹿児島大学生

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 澤口勇雄

岩手大学農学部と鹿児島大学農学部は遠隔地にありながら、兄弟校で縁が深いことは、農学部の前身、盛岡高等農林学校の初代校長玉利喜造先生が、本学に次いで郷里鹿児島に新設された鹿児島高等農林学校校長に赴任されたエピソードに始まる。

森林科学・林学の学問対象は、リージョナルからグローバルまで多様で広大な森林フィールドである。このため、森林をより深く理解するためには、異質な森林をできるだけ多く見聞する実体験が欠かせない。そこで、岩手大学と鹿児島大学は、互いの演習林を提供しあい、昭和54年から学生互換による教育交流を開始し、岩手大学では「温帯林概論」、鹿児島大学では「暖帯林概論」をそれぞれ開講し、本年度で27回を数えた。

温帯林概論、暖帯林概論は大学改革が進み学科改変やカリキュラムが変動する中で、学生から最も魅力のある授業の一つとして長年にわたる人気科目である。当然のことながら、受講のために数万円の自費（交通手段の選択で学生により相当の差がある）が必要なにもかかわらず、本年度は9月5日（月）～9月9日（金）に開講された温帯林概論に鹿児島大学農学部生物環境科学科21名、暖帯林概論に岩手大学農学部農林環境科学科31名が参加した。

以下、温帯林概論の概要を紹介する。大きな被害をもたらした台風14号が鹿児島に接近し、盛岡も雲行きが怪しい中、温帯林概論受講生は全員元気に農学部に集合した。

- 1日目 オリエンテーション、温帯林の野生動物の保護と管理（講義）（滝沢演泊）
- 2日目 温帯林里山の森林植物と森林林業（講義と実習）、冷温帯林の森林植物（講義と実習）（御明神演泊）
- 3日目 温帯林の森林作業（講義）、秋田スギ長伐期施業、ブナ2次林（見学）（御明神演泊）
- 4日目 八幡平、松川地熱発電所、森林ふれあい学習館（見学）（御明神演泊）
- 5日目 小岩井農場の森林経営・森林施業（見学）

以上のように、授業は温帯林を肌で感じるための実習・見学を柱にしているが、北東北の自然の豊かさや森林とともに生きてきた人々の姿を少しでも深く理解できるような内容にしたいと考え、周囲の温帯林をゆっくり眺めながらの露天温泉セラピーも取り入れ、これもなかなか好評である。4日目の夜は、2年前に暖帯林概論に参加した農林環境科学科4年（20名）や教員・技術職員との交流会、今年は岩大生の参加も特に多く、例年通り未明まで盛り上がった。

今年度は台風の影響もあり八幡平頂上を断念するなど、一部内容を変更せざるを得なかったのは残念だったが、授業終了後のアンケートによると、鹿児島大学では得られない知識、体験ができ刺激的で充実した内容とする答えや、宿泊施設も満足できるものだったとする嬉しい回答を頂戴して、本年度も無事、好評裏に終了した。

教育
トピックス

滝沢農場で得たものと私の思うところ

農学部農業生命科学科 3年次 小松 孝治

平成16年度までは植物生産学講座3年生の学生を対象に、寝食を共にした4泊5日の農場特別実習を行ってきた。この実習は平成17年度から講座科目から除外されたため、本年度は自主ゼミ「夏季特別実習」を立ち上げ、農業生命科学科2、3年を指導した。

私が今回の農場実習ゼミで最も印象に残っているものは、幾度となく飲んだ麦茶の味であるのだが、その他諸々、なんと新鮮な感覚に満ちた5日間であったことか。

一様にどの日も晴れており良かった。いや、晴れすぎて暑くてツライ思いをした。じりじりと陽の照りつける中、支柱を地面に突き刺すところから、脚立に上って防鳥網を張る作業などは一苦労だった。腕を丸出しにして畑の除草をやったら、ブヨに次から次へと喰われて、ひどい目に遭った。なにぶん私事だが、前日の夜に酒を幾分か飲みすぎて2日酔いになり、作業をさぼってバツリ寝ていた日もあった。

ツラかった記憶を列挙してしまっただが、楽しかった作業といえば、3台もの機械を駆使し、ラッピング機を作ったことがまず頭に浮かぶ。こんな体験をする機会はないだろうと思う。牛舎での作業もいい刺激になった。他にもブルーベリーの収穫や、水稻の生育調査、播種床への播種、ブルーベリージャム作りなどの作業を行ったが、様々な事柄が有機的に関連を持つ“農業”を学問するうえで、本実習の種々の体験は、この先きっと役に立つことと思う。部屋の中での講義とは趣を異にするフィールドの魅力と、「今、ここだからこそ」という体験ができたことに大きな充足感を感じた。

実習では多くの方のお世話になり、まず、ここに感謝を申し上げます。このような見事な場所があり、立派なスタッフもいるのに、参加者が定員割れしたことが随分心残りでもっといなく思う。



指導を受けながらラッピングマシンの操作を行なう

ジャージー牛の搾乳実習

農学部獣医学科 2年次 花田 直子

動物病院 岡田啓二先生より農家で牛管理の実習をやりたいという学生の紹介を受け、獣医学科の学生2名が夏休みを利用して滝沢農場で搾乳実習を行った。



ジャージー牛と触れ合う花田さん(右)

滝沢農場で搾乳実習をしたのは去年の夏でした。

しぶい(手搾りしづらい)牛の前搾りがうまくできなかったり、ミルクの装着が下手だったり、初めはけっこうへこみました。トラクターで育成舎の門をひん曲げたり、けっこうやらかしました。(農場の人は笑って許してくれました…)

そんなこんなで一緒に実習していた先輩のように鮮やかに搾乳できるようになった訳でもないけど、だんだん作業に慣れて、広々とした草地と人なつこいジャージーがいる滝沢農場が居心地よくてしょうがなくなった頃、実習が終わりました。

その後も何だかんだと理由をつけて農場に通った私は、当初、「何しにきた?」と不思議そうな顔をされたのが、「おめ、就職したのか。」と言われるまで通う厚かましい学生になったのでした。トラクターの運転、搾乳機の操作1つ1つでできるようになるのが嬉しくてもっとうまくなりたくて、牛のおもしろい仕草、性質を発見したり教えてもらえるのが楽しくて、授業が早く終わる日、午前中ない日、4号線を愛チャリで飛ばすのでした。そして、現場で見聞きしたことがでてくる時、本や大学の講義がたまたま興味深くなること、やる気がでることに気付きました。

1年の夏、滝沢農場で実習したのち、大学生活における行動の選択は大きく牛に傾いていくこととなり、岩手の素敵な牛飼いの人達に出会えました。なんとなく獣医学科に来て、卒業したら何してるのかわからないけど、やりたい方向-牛?は見えてきたのかなあと思う2年の夏です。

最後に、滝沢農場の阿部さん、赤坂さん、いつも邪魔しに行ってますみません。大変お世話になってます。これからもよろしく願います。

エクステンション
トピックス

「スキルアッププログラムから学んだこと」

山形森林管理署最上支署 鮭川森林事務所 森林官 市川 容子 ●



講師の説明を真剣な表情で聞く参加者

5月23日から27日までの5日間、「森林・林業技術者のための青少年森林環境教育スキルアッププログラム」に参加させていただきました。

今回のプログラムでは、森林環境教育を行う際のプログラムの作成方法、植物の名称や特徴、野生動物の生息数の調査方法など、幅広い分野について知識を深めることができました。実習科目の一つであるネイチャーゲームでは、目的に応じたゲームの選び方やゲームの盛り上げ方、ゲーム終了後の評価の必要性など、指導者として必要な指導技術を学びました。また、5日間の合宿生活を通じ、職場の異なる研修生同士が積極的に意見を交換できたことも有意義でした。

8月には、プログラムで学んだことを踏まえ、地元の鮭川保育所で森林教室を行いました。ブナの実などを見た子供たちの表情は好奇心に満ち、夢中になって手を伸ばしていました。今後も、森林教室などを通じて森林の良さ、面白さをこどもたちに伝えて行きたいです。

フィールド科学体験教室に参加して

高松小学校 5年 河西 龍生 ●

児童・生徒を対象に農業や食料生産現場への理解と親子の語らいの場の提供として市町村教育委員会の後援を得て、平成12年度から「フィールド科学体験教室」を開催している。

本年度は「ブルーベリーの収穫とジャム加工」をテーマとし、15名の参加があった。

ぼくは、8月5日岩手大学附属寒冷フィールドサイエンスセンター滝沢農場に行き、ブルーベリー収穫体験とブルーベリーのジャム加工に参加しました。

話や説明を受けた後、農場にある研究しせつや育てている農産物を見た後、ブルーベリーをつみとりました。

つみとったブルーベリーを食べるとスーパーで買っていた輸入ものよりおいしいのです。なぜかというところブルーベリーにほとんど農薬をかけていないからです。ブルーベリーの実は、ぶどうのようにつらなっていて見事でした。ブルーベリーを育てるには、年数もかかり、一粒一粒つむ作業も手間がかかって大変だと思いました。市販のブルーベリージャムはてんか物が入っていますが、農場のジャムはブルーベリー100%で作っています。その作り方を教えていただきました。甘ずっぱいとてもおいしいジャムが上手に出来ました。

ぼくは、この体験教室を通して、ブルーベリーだけでなく日本は輸入にたよっているのだから、これからは身近な地いきから農業を広げていくことが大事だと思います。



一粒ずつ収穫を行なう河西君

研究
トピックス

「水稲再生紙マルチ栽培」

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 坂本 甚五郎

水稲栽培の課題の一つとして環境への負荷を低減した栽培技術が求められている。環境保全型稲作の一栽培体系として、除草剤に頼らない雑草防除を目的とした再生紙マルチ栽培技術がある。滝沢農場では5月18日に環境に優しい米作りへの試みとして、再生紙マルチ水稲栽培に関する滝沢農場技術公開講座を行ない、稲作農家や市民、普及員を対象として、再生紙マルチ田植えの実演見学と環境に優しい安全性の高い稲作技術の展開について理解を深めた。

再生紙マルチ水稲栽培は田面を紙で覆うことによって、光を遮断し、雑草の発生を抑制することを目的に開発された技術であり、除草剤を使用することなく雑草を防除することが可能である。再生紙マルチ栽培を寒冷地での安定栽培技術として確立することによって、環境保全型栽培技術として山間地帯稲作にも紙マルチ利用栽培を普及することを目的としたものである。

このことは消費者の求める「安全、安心」な食料供給に貢献でき、

生産者にとっては生産米の高付加価値化に寄与し、新たな水稲栽培の展開が期待できる。



紙マルチ専用の田植え機

いわて農業者トップスクール修了生との意見交換会

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 渡邊 学

これまで2か年にわたり、いわて農業者トップスクールが開講され、108名の修了生を輩出してきた。しかし、在学中にトップスクールの学生が大学教員と交流する機会は限られており、学生が教員に技術相談や研究開発を依頼する場は十分ではない。そこで、昨年に引き続き、平成17年5月25日に岩手大学農学部において、「岩手大学農学部教員といわて農業者トップスクール修了生との意見交換会」を開催した。農学部教員15名と修了生12名が参加した。最初に各教員が自己紹介を行ない、その後、修了生との意見交換を行なうと同時に卒業論文の課題を募集した。修了生からは高校生や大学生に対する農業のインターンシップの必要性、農業に関して情報交換できる窓口の設置、果実等を利用した新たな商品開発や経営安定・改善のための栽培技術の開発等、多数の提案、要望が出された。また、大学教員はそれらの意見に対して具体的な事例を挙げ回答し、助言した。本意見交換会は大学教員と修了生の両者にとって意義のあるものとなり、大学教員と修了生

との今後の交流発展が期待される。



岩手大学農学部における卒業論文・修士論文テーマ公募に関するお知らせ

岩手大学農学部では岩手大学中期計画に基づき、地域社会のニーズの吸い上げと研究結果の地域社会との共有化を目的とし、卒業論文・修士論文のテーマを公募することとなりました。農学部における卒業論文・修士論文の研究のテーマとして取り上げてもらいたい事項の御希望がございましたら、下記までメールまたはFAXにて御連絡ください。折り返し、御連絡し詳細について御相談させていただきます。御応募をお待ちしております。

注) 卒業論文・修士論文のテーマは、学生・院生自身の希望も重視して設定されます。御応募いただいたテーマが、そのままの形で、すぐに研究に移されるかどうかについては確定できない部分もございますことをあらかじめ御了承ください。

【応募先】〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-8 岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター事務部
FAX: 019-621-6664 E-mail: fsciu@iwate-u.ac.jp

岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター

〒020-8550 盛岡市上田3丁目18-8 TEL/FAX 019(621)6234

E-mail: fsciu@iwate-u.ac.jp http://news7a1.atm.iwate-u.ac.jp/~fsciu/